

表現類語辞典

藤原与一
磯貝英夫 編
室山敏昭

東京堂出版

編者略歴

藤原与一（ふじわらよいち）明治四十二年愛媛県に生まれる。昭和十二年広島文理科大学卒業。広島大学文学部教授を経て、現在広島大学名誉教授。著書に『昭和日本語方言の総合的研究』（春陽堂書店）『昭和日本語の方言』（三弥井書店）などがある。

磯貝英夫（いそがひでお）大正十二年愛知県に生まれる。昭和二十年広島文理科大学卒業。広島大学文学部教授を経て、現在広島大学名誉教授、ノートルダム清心女子大学教授。著書に『昭和文学作家研究』（柳原書店）『森鷗外——明治二十年代を中心に』（明治書院）『文学論と文体論』（明治書院）などがある。

室山敏昭（むろやまとしあき）昭和十一年鳥取県に生まれる。昭和三十九年広島大学大学院文学研究科博士課程修了。現在広島大学文学部助教授。著書に『方言副詞語彙の基礎的研究』（たたら書房）『地方人の発想法』（文化評論出版）などがある。

室山敏昭（むろやまとしあき）昭和十一年鳥取県に生まれる。昭和三十九年広島大学大学院文学研究科博士課程修了。現在広島大学文学部助教授。著書に『方言副詞語彙の基礎的研究』（たたら書房）『地方人の発想法』（文化評論出版）などがある。

表現類語辞典

一九八五年三月三〇日 初版発行
一九九一年六月一日 五版発行

編者 藤原与一 磯貝英夫 室山敏昭

発行者 大橋信夫

印刷所 理想社印刷所

製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十七(二〇二)
電話東京三三三局三七四一 振替東京三三三〇

ISBN4-490-10192-9 C1581
Printed in Japan

©1985 Yoichi Fujiwara
Hideo Isogai
Toshiaki Muroyama

〈編著者〉

広島大学名誉教授 藤原 与一

広島大学教授 磯貝 英夫

広島大学助教授 室山 敏昭

〈協力者〉

佐賀大学教授 榎林 滉二

兵庫教育大学助教授 相原 和邦

滋賀大学教授 寺横 武夫

大分大学教授 江後 寛士

和光大学助教授 塩崎 文雄

鳴門教育大学助教授 田辺 健二

島根大学助教授 木村 東吉

序

昭和四十年あるいは三十九年 私は 時の編集課長石井良介氏に約した
類語辞典と基本語辞典の製作を

類語辞典 私はかねて表現生活のための類語辞典を念としていた

ことをおこすにあたっては

標示語にかかわる典範文例の探索を重んじた

独創的な新記述を重んじた

とくに心すべきは

「表現↓類語辞典」いっさいを処理する清純の言語感覚である とした

私は 抱負の実現のため

仕事の主班を 年来の信友磯貝英夫兄に嘱した

兄は 秀抜の文学者であって語学者である

つねに その達識をもって 私の方言研究をも熟視していただく

『表現類語辞典』を 文学畑の人たちの手で研究してもらおう

この心で 私は 磯貝兄のもと 近代文芸研究の つぎの諸君に集まってもらった

榎林滉二君 相原和邦君 寺横武夫君

のちに 江後寛士君 塩崎文雄君 田辺健二君 木村東吉君

昭和四十一年から 研究会が始まった

私は毎度 所見発表にしたがった 諸君も発表した

はじめ私が強調したのは

諸君の文芸感覚即言語感覚をみがきながら仕事をしてもらいたい

ということであった

夜の研究室（広島大学文学部）での活発な討究会がいくど催されたことか

四十三年、四十四年には 研究合宿もおこなわれた

諸君の分担「文例カードとり」も進捗した

このころ 一面では 作者たる諸君のなやみの深刻なものも じじつあった

私は 訴えを聞くたびに

諸君こそ ことばの生きたはたらきのよくわかる人なのだ

文の芸 ことばの芸術の研究者ではないか

と言って激励した

ことは進むと考えられたところおい

諸君の就職関係の移動もあれこれとおこつて

ついに仕事は中やすみ状況となつた

とはいつても 個人作業の分担「原稿づくり」は個々に進められもして
長い間でのことではあり

総体の原稿量は 大いに敬重すべきものとなつた

この間 出版社の屢次の進行要望のあつたことは 言うまでもない

先年 私は 意を決して 磯貝兄に議し 再出発をはかることにした
すなわち ことをあげて室山敏昭兄に托し

本辞典を一気に修成することができれば と考えた

さいわい 磯貝兄は諒とせられ 室山兄も欣諾されて

昭和五十八年五月には 三者 磯貝研究室に会同

すべての研究物作業物が 室山兄に手交された

兄は わけても語彙論を専門とする新鋭の学究である

路線敷かれて原稿もなかばという辞書作業を修理固成するには

願ったり叶ったりの人である

兄の俊敏な活動が始まった

既稿の修訂作業がまず好調だった

やがて新規の起稿ともなった

全般を通じて 用例の新集も活発におこなわれた
すべては 申し分のない順調さであった

憶えば 草創期より今日まで

苦楽を共にしてくださった諸君すべての

懸命のご尽力がありがたい

今 本ができる

『表現類語辞典』よ！

つつしんで

世のご批判を乞う

昭和六十年二月

藤原与一

『表現類語辞典』のねらい

一 この辞典は、よりよい言語表現生活を求めるすべての人々に、多少とも貢献しうることを願いとして編まれた。日本語は、とりわけ多くの類語を持っており、われわれは、ほとんど無意識のうちに、それらを微妙に使い分けている。従来、解明されるところのかなりしも多くないその使い分けかたを、できるだけ明らかにして、人々の表現生活の資とすることが、この辞典のねらいである。

二 そのために、この辞典では、一二三三種の類語グループをとりあげ、総計八三六一語について、解説を試みた。われわれが日常的に使っていることばを対象とし、しかも、それをできるだけ多くという願いが、この数字になった。解説は、類語相互の意味の重なりとずれ、また、ニュアンスの差の定言化に重点をおき、時には、やや冒険と思われる説明をもあえてして、読者の批評による解明の進展に期待した。これらの解説が、より深い読解と、より豊かな表現への道のよいいとぐちとなるならば、幸いである。

三 類語の使い分けの具体相を明らかにするために、近現代文学作品二八九種（これ以外に、用例を三例以下引用した作品が、なお約七十種ある）から文例をとり、それも、できるだけ長く（最低一文、時には三文にわたって）引用することにとめた。表現の機微をもっともよく示すものは、生きた文例である。文学作品からとった豊饒な文例が、この辞典を、読んでたのしいものにすると同時に、表現について考えるための好資料となり、また、人々の表現活動のための好典範となることも、ここにこめられている願いである。

この辞典を使う人のために

〔引き方〕

1、それぞれの類義語のグループのうち、最も意味用法が広く、一般的に使うと思われるものを見出し語として最初に平仮名で示し、そのあとに、類義語を一括して掲げた。ついで、各類義語を、一括して掲げたその順序に従って小見出しとして立て、各語ごとに解説を行った。

2、類義語の並べ方は、類義語の各グループの見出し語の五十音順による。

3、したがって、求める語がどこにあるかを知るには、まず巻末の索引によることが便利である。

〔内容〕

1、この辞典は、現代の言語生活において、最も普通に用いられる日常語を中心として、一二三の類義語のグループを取り上げ、八三六一語の異なり語を収録したものである。『現代雑誌九十種の用語用字』（国立国語研究所報告21）によると、現代日本語の語彙の使用率の高いものから順々に数えていって、それが文章の中で占める割

合を調べてみると、一万語で全体の九一・七%をまかなうことができるという。したがって、本辞典は、今日の日常語を中心とする、文章語（一部、雅語も含む）、口頭語（一部、俗語も含む）の基本的なものをほぼ尽くすだけの語彙量を備えていると言ってよい。

2、類義語のグループの選定、ならびにグループごとにどれだけの類義語を取り上げるかは、『分類語彙表』（国立国語研究所、秀英出版）によって決定した。使用頻度の高い語を中心として選定したことは言うまでもない。また、『分類語彙表』に記載されていない語で、取り上げる必要があると編著者が判断して加えた語も少なくない。

3、類義語のグループごとに、各語について次の順序で説明を行った。まず、品詞名を示し（活用語は活用の種類を示し、名詞・副詞のうち、サ変動詞またはいわゆる形容動詞としての用法を併せ持つものは、そのことを明示した）、次いで語義をそれぞれの語の基本義を中心として記し、意味用法が広く多義であるものは、①②③などの形で列記した。その後に、それぞれの語の使用例を、近代文学の諸作品から引用して示し、個々の使用例ごとに作家・作品名を明示した。近代文学作品に適例が見出せない語については、編著者の方で用例を作成して示した。また、用例の後に、㊦、㊧、㊨等の符号を用いて各語の関連語形を示し、㊩、㊪として、反義語、転成語を

示した。

4、したがって、本辞典は、類義語辞典としてだけでなく、一般の国語辞典としても使用しうるものである。また、現代の言語生活において最も普通に用いられる日常語を中心に、八三六一語の異なり語を収録しているもので、基本語彙辞典としての役割をある程度は果しうるものである。さらに、各語の使用例を近代文学の諸作品から引用して示したので、基本語彙の用例辞典としての使用にも耐えうるものと考ええる。

5、類義語相互の意義の違いは、典型的な用法から取り出される基本義を中心にして説明し、周辺の用法の具体義や、基本義から派生した比喩的意味用法については、必要に応じて基本義との関係に即して説明を行った。類義語の意義分析の手順は、まず、各グループの見出し語の基本義を、典型的な用法に基づいて、それを形成する意味の重要な特徴を明らかにすることによって帰納し、次いで、そのグループに所属する各類義語の意味の特徴を見出し語をはじめとして、他の類義語と比較することによって、相互の意義の違いをできるだけ客観的に解明した。そして、それらの意義分析の結果に基づいて、各類義語を実際に使用する場合、どのように表現し分けたらよいかに触れるという順序で行った。そのあとに、近代文学の諸作品から引用した適例を示すことによって、

各類義語が、文学作品においてどのように使用されているかの実際を示した。使用された典例を示し、意義の違いを具体的に説明することによって、単に、一々の類義語の意義差の理解だけでなく、実際の表現にも資するよう、十分配慮したつもりである。ただ、全体の分量の関係から、一々の類義語の基本義を構成する意味の特徴のすべてにわたって、その重なりとずれとを指摘することはできなかった。読者が、この辞典を手がかりに、編著者の触れることのできなかった意味の特徴を補いながら、さらに豊かなことばの意味の世界に分け入って下さるならば、編著者にとつては望外の幸せである。

6、類義語の意義の違いに関する説明は、語義を中心に行い、必要に応じて文法的な特徴の相違についても指摘したが、それ以外に、文体的な相違を説明するために、次のような術語を用いた。

文章語(主として文章語に使用されるややかたい言い
かた)

日常語(文章語、口頭語のどちらにも使用され、日常
の言語生活において多用される言いかた)

俗語(内輪の間柄、親しい関係にある相手との間で用
いられるくだけた言いかた)

漢語的表現(その語にほとんど同義の関係で和語が対
応する場合の漢語で、かたい改まった言いかた)

雅語的表現(日常のくだけた会話や文章には用いられず、短歌・俳句・詩などの詩的表現に多用される言いかた)

文語的表現(文語文や古風な文章語に多用される言いかた)

また、使用される度合については、最も一般的、現在にはあまり用いないなど、その都度、具体的に説明した。

〔用例〕

この辞典に用例を引用した近代文学の諸作家・作品名を、作品名の五十音順に示す。なお、引用文の表記は、今日の読者の便宜を考えて、現代表記に統一した。(作家数六十人、作品数二八九点)

あ 愛と死(武者小路実篤) 青猫(萩原朔太郎) 「青猫」

以後(萩原朔太郎) 晶子曼陀羅(佐藤春夫) 悪魔(国

木田独歩) あすなろ物語(井上靖) 頭ならびに腹横

光利(一) 新しき欲情(萩原朔太郎) 阿部一族(森鷗

外) 雨蛙(志賀直哉) 天草の雅歌(辻邦生) あらく

れ(徳田秋声) 嵐島崎藤村) ある崖上の感情(梶井

基次郎) ある心の風景(梶井基次郎) 或る女(有島武

郎) ある女の生涯(島崎藤村) ある恋の話(菊池寛)

暗夜行路(志賀直哉)

い 飯倉だより(島崎藤村) 家(大岡昇平) 異形の者(武

田泰淳) 伊豆の踊子(川端康成) 異端者の悲しみ(谷崎潤一郎) 芋粥(芥川龍之介) 入江のほとり(正宗白鳥) 岩の上(井上靖)

う 飢えた皮膚(安部公房) 歌行燈(泉鏡花) 歌のわかれ

(中野重治) 美しい女(椎名麟三) 娼捨記(堀辰雄)

生まれ出づる悩み(有島武郎) 生まざりしならば(正宗白鳥) 海辺の光景(安岡章太郎) 運芥川龍之介)

運命論者(国木田独歩)

え S・カルマ氏の犯罪(安部公房) Xへの手紙(小林秀雄)

お

大石良雄(野上弥生子) 男と女と荷車(川端康成) 折

靴(徳田秋声) 恩を返す話(菊池寛) 恩讐の彼方に

(菊池寛) 女(川端康成) 女相続人(大岡昇平) 女の

夢(川端康成)

か 海神丸(野上弥生子) 海潮音(上田敏) 回転木馬(中

村真一郎) 顔の中の赤い月(野間宏) 学問(小林秀

雄) 崖(梅崎春生) 駈込み訴え(太宰治) 過去(梶井

基次郎) かし間の女(永井荷風) かしわ林の夜(宮沢

賢治) 仮装人物(徳田秋声) 蟹工船(小林多喜二)

硝子戸の中(夏目漱石) 鳥の北斗七星(宮沢賢治) 彼

は昔の彼ならず(太宰治) 河霧(国木田独歩) 雁(森

鷗外) 歓楽(永井荷風) き 黄色い日日(梅崎春生) 器樂的幻覚(梶井基次郎) 婦

郷(井上靖) 菊池寛論(小林秀雄) 煙管(芥川龍之介)

北の駅路(井上靖) 城の崎にて(志賀直哉) 休憩時間

(井伏鱒二) 牛肉と馬鈴薯(国木田独歩) 狐の手套

(堀辰雄) 虚妄の正義(萩原朔太郎) 金閣寺(三島由

紀夫) 金の輪(小川未明)

空中楼阁(安部公房) 邦子(志賀直哉) 暗い絵(野間

宏)

け 現代文学者の階級的性質(青野季吉) 現代文学の十大

欠陥(青野季吉)

と 洪水(井上靖) 交尾(梶井基次郎) 幸福な家族(武者

小路実篤) 高野聖(泉鏡花) 刻々(宮本百合子) こ

ゝろ(夏目漱石) 悟浄出世(中島敦) 小僧の神様(志

賀直哉)

さ 再会(川端康成) 再会(大岡昇平) 最後の一句(森鷗

外) 桜島(梅崎春生) 細雪(谷崎潤一郎) ささん花

(川端康成) 実朝(小林秀雄) 様々なる意匠(小林秀

雄) 猿(芥川龍之介) 山月記(中島敦) 山椒魚(井伏

鱒二) 山椒大夫(森鷗外) 三太郎の日記(阿部次郎)

三人(島崎藤村) 散文詩(萩原朔太郎)

し 死(国木田独歩) 潮騒(三島由紀夫) 志賀直哉(小林

秀雄) 志賀直哉論(小林秀雄) 地獄変(芥川龍之介)

私小説論(小林秀雄) 蜆(梅崎春生) 詩人の生涯(安

部公房) 司馬遷(武田泰淳) 十五歳詩集(三島由紀夫)

十五年間(太宰治) 縮図(徳田秋声) 受験生の手記

(久米正雄) 樹々新緑(佐多稻子) 俊寛(菊池寛) 巡

査(国木田独歩) 小説の方法(伊藤整) 昭和文学作家

研究(磯貝英夫) 白(芥川龍之介) 白い街道(井上靖)

城のある町にて(梶井基次郎) 真贋(小林秀雄) 新世

帯(徳田秋声)

す 水仙月の四日(宮沢賢治) 水都市(安部公房) 雀の

媒酌(川端康成) 砂の女(安部公房) すみだ川(永井

荷風)

せ 聖家族(堀辰雄) 生活の探求(島木健作) 正義派(志

賀直哉) 星座(有島武郎) 青年(森鷗外) 清兵衛と

瓢箪(志賀直哉) 生命の樹(高見順) 絶望の逃走(萩

原朔太郎) 瀬山の話(梶井基次郎) 一九二八・三・

一五(小林多喜二) 仙人(芥川龍之介) 千羽鶴(川端

康成)

そ 僧迦羅國縁起(井上靖) 蒼穹(梶井基次郎) その妹

(武者小路実篤) それから(夏目漱石)

た 当麻(小林秀雄) 高瀬舟(森鷗外) 焚火(志賀直哉)

滝へ降りる道(井上靖) 忠直卿行状記(菊池寛)

ち 小さな世界(武者小路実篤) 千恵子抄(高村光太郎)

千恵子の生き方(田宮虎彦) 父(大岡昇平) 父(芥川

龍之介) 茶料理(野上弥生子) 偷盗(芥川龍之介)

注文の多い料理店(宮沢賢治) 陳述(佐藤春夫) 闖入

者(安部公房)

つ 月に吠える(萩原朔太郎) 土(長塚節) 妻(大岡昇平)

つゆのあとさき(永井荷風) 徒然草(小林秀雄)

て 手(安部公房) 弟子(中島敦) 田園の憂鬱(佐藤春夫)

デンドロカカリヤ(安部公房)

と 投網(井上靖) 東京の三十年(田山花袋) 東京八景

(太宰治) 藤十郎の恋(菊池寛) 党生活者(小林多喜

二) 道程(高村光太郎) 都会の憂鬱(佐藤春夫) 杜

子春(芥川龍之介) 椽の花(梶井基次郎) 斗南先生

(中島敦) 富岡先生(国木田独步) トロッコ(芥川龍

之介) どんぐり(寺田寅彦) どんぐりと山猫(宮沢賢

治)

な 中原中也の思い出(小林秀雄) 梨の花(中野重治) 波

(山本有三) 波の音(国木田独步) 軟骨の精神(安岡

章太郎)

に 二十六夜(宮沢賢治) ニヤ札つかいの手記(武田泰淳)

人間失格(太宰治)

の 野火(大岡昇平) 伸び仕度(島崎藤村)

は 破戒(島崎藤村) 馬喰の果て(伊藤整) 走れメロス

(太宰治) 破綻(伊藤整) 八十八夜(太宰治) 鼻(芥

川龍之介) 花小金井から(田宮虎彦) 花物語(寺田寅

彦) 母の死と新しい母(志賀直哉) 母の初恋(川端康

成) バベルの塔の狸(安部公房) 春の城(阿川弘之)

晩夏(井上靖) 手巾(芥川龍之介)

ひ ひかり(こけ)(武田泰淳) 彼岸過迄(夏目漱石) 一人息

子(田宮虎彦) 氷島(萩原朔太郎) 人妻(永井荷風)

秘密(安岡章太郎) 悲恋十年(田宮虎彦)

ふ 夫婦(国木田独步) 深川の唄(永井荷風) 富嶽百景

(太宰治) 武士道(小林秀雄) 二人妻(永井荷風) 二

つの庭(宮本百合子) 蒲団(田山花袋) 冬の蠅(梶井

基次郎) 俘虜記(大岡昇平) 文科大学挿話(川端康

成) 文芸評論(小宮豊隆) 分配(島崎藤村)

へ 平凡(二葉亭四迷)

ほ 崩解感覚(野間宏) 帽子(井上靖) 防雪林(小林多喜

二) 放浪記(林芙美子) 溼東綺譚(永井荷風) ほく

ろの手紙(川端康成) 坊つちゃん(夏目漱石) ポラン

の広場(宮沢賢治)

ま 正宗白鳥(小林秀雄) 貧しき人々の群(宮本百合子)

末期の眼(川端康成) 魔法壘(井上靖) 蝮のすゑ(武

田泰淳) 丸善と三越 (寺田寅彦) 万暦赤絵(志賀直

哉)

み 蜜柑(芥川龍之介) みごとな女(森本薫) 道草(夏目

漱石)

む 武蔵野(国木田独步) むらぎも(中野重治)

め 眼(井上靖) 明暗(夏目漱石) 名人伝(中島敦)

も 妄想(森鷗外) 默契(井上靖) 紋章(横光利一)

や 矢島柳堂(志賀直哉) 安井夫人(森鷗外) 屋根の上の
 サワン(井伏鱒二) 大和路(堀辰雄) 山の音(川端康
 成) 闇の絵巻(梶井基次郎)
 ゆ 友情(武者小路実篤) 雪国(川端康成) 雪解(永井荷
 風) 夢十夜(夏目漱石) 雪渡り(宮沢賢治)
 よ「夜明け前」論(青野季吉) 夜ふけと梅の花(井伏鱒二)
 ら 羅殺女国(井上靖) 羅生門(芥川龍之介) 蘭学事始
 (菊池寛)
 り 竜舌蘭(寺田寅彦) 旅愁(横光利二) 李陵(井上靖)
 李陵(中島敦)
 れ 歴史(川端康成) 檸檬(梶井基次郎)
 ろ 狼災記(井上靖) 路傍の石(山本有三) ロマネスク
 (太宰治) 楼蘭(井上靖)
 わ 若い息子(野上弥生子) わが小説観(中村真一郎) 吾
 輩は猫である(夏目漱石) わが復員(大岡昇平) わか
 め(川端康成) 私は月をながめ(中野重治) 我々の文
 芸運動と政治運動(青野季吉)
 右に記した作品は、各種文庫本と講談社版日本文学全集
 を底本として用いた。なお、右の二八九種の作品以外に、
 用例を三例以下引用した作品が約七十種あるが、その作品
 名を掲げることは省略した。

〔略語〕

この辞典に用いた略語は、次の通りである。

- (名)……………名詞
 (代)……………代名詞
 (動五)……………五段活用動詞
 (動上一)……………上一段活用動詞
 (動下一)……………下一段活用動詞
 (動カ変)……………カ行変格活用動詞
 (動サ変)……………サ行変格活用動詞
 (形)……………形容詞
 (形動)……………形容動詞
 (副)……………副詞
 (感)……………感動詞
 (接)……………接統詞
 (連体)……………連体詞
 (接頭)……………接頭辞
 (接尾)……………接尾辞
 (造語)……………造語成分
 また、名詞・副詞のうち、サ変動詞またはいわゆる形容
 動詞としての用法を併せ持つものは、次のように略記した。
 (名・ダ形動) (名・スル動サ変)
 (副・スル動サ変)

〔参考文献〕

一々の語の意義記述ならびに類義語間の意義の相違を研究するのに参考とした文献、および類義語の問題を考える上で参考になると思われる文献を、以下に列記する。とくに、『類義語辞典』『新明解国語辞典』『ことばの意味』『動詞の意味用法の記述的研究』『形容詞の意味用法の記述的研究』『例解国語辞典』『例解新国語辞典』は、一々断ることはしなかったが、多くの箇所を参照させていただいた。学恩に対して、心から感謝の意を表したい。

『類義語辞典』徳川宗賢・宮島達夫（東京堂出版、一九七

二）

『類語辞典』広田栄太郎・鈴木棠三（東京堂出版、一九五

五）

『分類語彙表』国立国語研究所（秀英出版、一九六四）

『類義語の研究』国立国語研究所（秀英出版、一九六五）

『動詞の意味用法の記述的研究』宮島達夫（秀英出版、一九

七二）

『形容詞の意味用法の記述的研究』西尾寅弥（秀英出版、一

九七二）

『ことばの意味』柴田武（平凡社、一九七六）

『ことばの意味』2 柴田武（平凡社、一九七九）

『ことばの意味』3 国広哲弥（平凡社、一九八二）

『意味論の方法』国広哲弥（大修館書店、一九八二）

『基礎日本語』1・2 森田良行（角川書店、一九七七・一九

八〇）

『国語語彙論』田中章夫（明治書院、一九七八）

『意味の世界』池上嘉彦（日本放送出版協会、一九七八）

『語彙原論』佐藤喜代治（講座日本語の語彙）1、明治書

院、一九八二）

『英語学大系第七巻 語彙論』柴田省三（大修館書店、一九

七五）

『岩波講座日本語9 語彙と意味』大野晋・柴田武（岩波書

店、一九七七）

『英語基礎語彙の研究』服部四郎（三省堂、一九六八）

『意味と構造』エルンスト・ライズイ（研究社出版、一九六

〇）

『意味の構造——成分分析』ユージン・A・ナイダ（研究社

出版、一九七七）

『日本語研究』第1号〜第5号 東京都立大学日本語研究会

（一九七八〜一九八三）

『意味論研究会報』野林正路（第一巻第一号〜第二巻第一〇

号、一九八三〜一九八四）

『法令類似用語辞典』小島和夫（ぎょうせい、一九七五）

『法律類語難語辞典』林大・山田卓生（有斐閣、一九八四）

『食のことば』柴田武・石毛直道（ドメス出版、一九八三）